

## コリント人への手紙第一2章6-7節 「神のとおきおきの知恵」

### 1A 成熟した人たちへの知恵 6

1B キリストにある神の知恵

2B この世の支配者の知恵

### 2A 奥義の内にある知恵 7

1B 隠された神の知恵

2B 世界の始まる前からの定め

## 本文

コリント人への手紙第一2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コリント第一1章を前回、終えました。今日は午後礼拝で、2章を一節ずつ見ていきます。今朝は、6-7節に注目します。「<sup>6</sup>しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。<sup>7</sup>私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。」

パウロが、コリントにある教会に手紙を書いている時に、いろいろな問題があったので、それを福音の真理に照らして正していったのが、この第一の手紙であることを、前回、学びました。その始めにあるのが、分派の問題ですが、その背後にあるのは、コリントにある知者とも呼ばれる人々の文化があったことをご説明しました。自分が、物事について知っているとする知恵を披露して、影響力を広げて、自分についてくる人々を増やすというような文化です。そして、一般の人々も、影響力がある人々に付いていくことによって、それで自分の居場所があるという文化です。その時に、影響力を持つ知者は、話している内容以上に、その話し方がどれだけ雄弁であるかが大切にされていました。そうした中で、コリントの人たちは、教会の指導者たちを自分の追い求める知者であるかのようにみなし、私はパウロに、私はアポロに、私はケファに、私はキリストにという、派閥を作っていました。

そのような、いろいろな知恵とか呼ばれているものがいっぱいある中で、パウロは、キリスト、ことに十字架に付けられたキリストしか知るまいと決めて、その福音を中心にして語って行きました。しかも、コリントの人々が好むような、説得力をつけたような話し方に頼りませんでした。けれども、それは知恵がないということではありません。それがここでパウロが説明しているところです。神はなんと、世の始まる前からご計画を立てておられて、それを今、十字架につけられたキリストを通して明らかにしてくださったのです。

世の支配者は、政治の権力者も、宗教の権威もこの方を見捨てました。しかし、世の支配者たちは滅んでいきましたが、その見捨てられた方の名が、世界中で呼び求められ、現に私たちもその御名を賛美しているのです。ローマ皇帝カエサルは、当時は国民によって救い主と称えられ、その像には香がたかれました。その反面、イエスはナザレの貧しいユダヤ人の間で、飼い葉おけでお生まれになり、大工の息子として育ちました。しかし今、ローマ皇帝は称えられていません。イエスの御名は、世界中で、王の王、主の主として、救い主として、神の子としてあがめられています。神は実に、彼らが見捨てたこと、つまり十字架につけたことさえお用いになり、この方がとこしえにほめたたえらえる主として定められたのです。

神は、低い者を高くし、高い者を低くする、どんでん返しをなさる方ですね。つまらないものを貴いものとし、貴いものをつまらなくする方です。詩篇に預言があったように、「118:22 家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと、私たちの目には不思議なことだ。」捨てた者が、要の石だったのです。

私は、いつもマグロの大トロのことを思いです。寿司のネタで最も高いものの一つですね。けれども、そうになったのはなんと、1960年代代だそうです。日本の歴史では、マグロ自体は嫌われた魚で、醤油が導入された江戸時代に、屋台で食べるものとして流行ったそうです。けれども、油脂の多いトロは、なんと「猫またぎ」、つまり猫も食べないほどの部分で、食べ物ではない、という見方さえあったそうです！<sup>1</sup>事実、ドイツに長く住んでいた日本人の人が、ドイツでは大トロの部分は初め廃棄されていたと聞きました。日本人が好んで食べているのと後で知って、それからは高値で売っているそうです！

イエス様の十字架を、マグロの大トロに喩えてしまっただけでは、価値が下がりますね。けれども、神が永遠のご計画の中で、神の知恵の集大成の中で、待ってました！とばかりに、使徒たちが生きていた時代に披露されたのが、メシア、キリストの死だったのです。どう考えても、受けが悪い。いや、愚かな行為であるか、あるいはつまらずでしかない。けれども、それこそが神の知恵であり、事実、罪から救われる人々が出てくる、ということです。

## 1A 成熟した人たちへの知恵 6

### 1B キリストにある神の知恵

パウロは初めに、「しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語りません。」と言っていますね。ここの「成熟した人たち」というのは、だれのことでしょうか？特別に、霊的に成長した人ということ、誤解があります。十字架につけられたキリストのことは信じているが、他のいろいろな知識や素養がある人、と思ったら大間違いです。2章の最後で、パウロはこう言いました。「2:30 しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知

<sup>1</sup> <https://bushoojapan.com/jphistory/food-jp/2019/02/27/15199>

恵、すなわち、義と聖と贖いになりました。」キリストの十字架は信じているが、ではなく、キリストの十字架にこそ、神の知恵があると知っている人々のことです。

キリスト教会の生活が長いと、その世界で話題になるものがいろいろ出てきます。私が信仰を持って間もない時に気づいたのは、カウンセリングが流行っていたのを思い出します。キリスト者といったら、精神的、心理的な弱さを持っている人々に寄り添うことなのだというのが、多く語られていました。けれども、そういったカウンセリングを受けた人たちが、心は安定するかもしれませんが、キリストの十字架の前で砕かれたというところから始まっていません。人間中心の見方から離れられません。キリストにあって砕かれるのではなく、いかに自分が強められるか？ということが目的になっているからです。

社会の正義を求める人々もいます。特定の神学にはまっけていく人々もいました。それぞれが、役割があり、福音から始まって、その延長でそれぞれに関わっていれば、それはすばらしいことです。けれども、いつの間にか、キリストだけでは不十分で、その他の専門的な知識、知恵があるからこそ、あなたは救われている、霊的になれているという思わせる傾向があります。これが、まさにコリント人の犯した過ちだったのです。そして、そういった専門的な知識があるほうが霊的であるかのように思ってしまう。成熟しているかのように、いかにもクリスチャン的、霊的であるかのように見えるのです。けれども、その反対で、十字架につけられたキリストに、神の力、神の知恵があることを知っている人が成熟した人であります。

## 2B この世の支配者の知恵

こうしてパウロは、「知恵」という言葉を使いました。するとコリントの人たちは、知恵にはすぐ敏感に反応しますから、すぐに言い換えます。「この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。」

この世の知恵ではないことは、1章からずっと話しています。ここでは、「この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません」と付け足しています。この支配者たちは、パウロが念頭に入れているのは、一番具体的には、ローマ総督ピラトとユダヤ人の王と言われたヘロデでしょう。なぜなら、「もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」と8節で言っているからです。イエス様は、十字架という、ローマの極刑によって死なれました。この世の支配者は、自分たちの政治的思惑で、イエスが死ぬようにすることは得策だとみなしたのです。それから、もしかしたら大祭司カヤパも、この世の支配者の知恵に入れていたかもしれません。カヤパは、ユダヤ国民がローマによって滅ぼされるよりも、一人が死んだほうがよいとして、イエスを十字架に引き渡すように総督に要求するのは得策だと考えました。

しかし、イエス様が三日目に死者の中からよみがえることによって、これら世の支配者の知恵が

かえって、神の救いのご計画の中に組み込まれていたことが明らかにされるのです。その死が、全世界の罪の赦し、清めのための犠牲だったのです。しかも、総督ピラトもしても、ヘロデもしても、その後、過ぎ去っていきました。その支配していたローマ帝国も滅びたのです。キリストを王とする者たちの国はどうでしょうか？二千年経った今、この極東、日本にまで広がっているのです！

ここで、二つの国があることに気づいてください。世を支配する人々がいます。この人たちは政治権力の知恵を持っています。けれども、神の国があります。神は永遠の国の王です。神は、永遠に生きておられ、すべてを知っておられ、その上ですべてを治めておられます。その神が、キリストをご自分の選ばれた者とされ、永遠の国の王とされるのです。人間の国にある知恵は、神のキリストに呑み込まれ、打ち砕かれるのです。しかし、その方法は、権力でも武力でもないのです。憐れみと正義と公正によるものでした。「イザ 42:1-4 見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。2 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。4 衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」

ダニエル書にある、ネブカドネツアル王の見た夢のことを思い出してください。人の像が夢の中で立っていました。異様なほどの輝きがありました。ところが、金は頭だけです。その後で、胸と両腕は銀であり、下腹と太ももは青銅、両脚は鉄、そして足と足の指は、粘土と鉄が混じっています。それぞれが、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、ローマ、そしてローマ以後の世界であります。世の支配者が知恵をもって支配していても、いずれ他の力ある者、主権者にとって替えられます。けれども、人手によらず切り出された石が出てきます。その石が、粘土と鉄の混じった足のところにぶつかりました。すると人の像全体が粉々に砕け、その石は大きな山となったのです。この石は、キリストを指しています。そして、大きな山とは、とこしえに続く神の国です。このように、世の支配者の知恵は、過ぎ去っていきます。しかし、永遠の神の立てた知恵は、決して過ぎ去ることなく、ご計画は堅く立つのです。

## 2A 奥義の内にある知恵 7

そして、パウロの語る知恵とは、どんな知恵なのかを 7 節で説明しています。「**7 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのもあって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。**」

## 1B 隠された神の知恵

「**奥義のうちにある、隠された神の知恵**」とパウロは言っています。この奥義とは何か？使徒たちの手紙で数多く、自分たちに奥義が明かされた話が出ています。最近、学んだ、ローマ人への手紙 16 章の最後がその一つです。「16:25-26 [私の福音、すなわち、イエス・キリストを伝える宣教

によって、また、世々にわたって隠されていた奥義の啓示によって——26 永遠の神の命令にしたがい、預言者たちの書を通して今や明らかにされ、すべての異邦人に信仰の従順をもたらすために知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを強くすることができる方、」とあります。つまり、はるか昔に、実に永遠の神が、この世界を造られる前から懐に抱かれていたご計画です。それを、次第に、旧約時代の預言者たちに語られていました。本人たちは、どういったことなにか十分な理解ができませんでした。けれども、約束のキリストが来られて、そのキリストの復活を目撃した使徒たちに、はっきりと明らかにされたということです。

パウロは、エペソ人への手紙でも同じことを語っています。「エペ3:5-6 この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」イエス・キリストが十字架で死なれ、よみがえられ、そして御霊が注がれたことによって、ユダヤ人だけでなく、異邦人も、神の国の約束にあずかるようになったということだと、パウロは定義づけています。

使徒ペテロは、パウロよりも、感情を込めて奥義についてこのように明かしています。「I ペテ1:11-12 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」旧約の預言者たちが、自分たちは神から啓示を受けていて、キリストの苦難とそれに続く栄光、つまりよみがえられて、天に昇られたということを前もって証しされていました。けれども、それは自分たちの時代ではなく、先のことだと示されていたのです。そして今、使徒たちなどに聖霊が注がれて、それで、今の時代に明らかにされたのだ、ということなのです。彼らも知りたいた願っていたこと、御使いでさえ知りたいた願っていたことが、今、明らかにされています！ということです。

実は、そのことをイエス様ご自身が、弟子たちに語られていました。神の国の奥義を、弟子たちだけに語られていた時です。「マタ13:16-17 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。17 まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」

これで大体、お分かりになったのでしょうか？ 私たちには、新約聖書を通して明らかにされた福音の真理は、旧約の時代には預言されていましたが、けれどもその時代の人々には、実際のよ



うなものか明らかにされていませんでした。神は、むしろその時のため、キリストが現れる時のためにその真理を明らかにするのをじっくりと待っておられて、それで、その内容を全開してください、ということです。

多くの人が、「初めから分かっているなら、初めから明らかにしてくれたらよかったのに」と思います。けれども、その真理のすばらしさを、初めから明らかにされたところで、そのすばらしさが分からず、その真理を受け入れるどころか、捨ててしまう、歪めてしまうことでしょう。例えば、スマホについて話します。iPhone は、今は 12 まで来たんですね？ スティーブ・ジョブスが iPhone を発表したのが 2007 年です。タッチ操作、電話、ネット通信の三つが一つになったと言って、観客が興奮しています。けれども、もしそれがいきなり、iPhone12 が当時、発表されたらどうでしょうか？ いや、パソコンも、Windows も、携帯電話もなかった時に iPhone12 が発表されたら、訳が分からないのではないのでしょうか？ こんなのでしょうか？ として、ごみ箱行きになってしまうかもしれません！ 少しずつ、明らかにされていって、それで初めて今の機能を感じることができるし、使いこなせます。

同じように、神は、ご自分の造られた人が、キリストにあってその罪が赦されて、ご自分の愛する子どもにし、そしてすべてキリストにあって集められた神の国を相続するというご計画が、いきなり、例えばノアの時代に示されても、訳が分からなかったと思います。神はまず、アブラハムを召され、そして彼に約束を与えられ、彼の子孫から出る国民を選びの民としました。そして、ご自分の都をエルサレムに定められ、そこから、アブラハムの子孫キリストによって神の国を立てられるご計画にされていたのです。イスラエルの国民が律法の中で生きて、その中で次第に神が明らかにされて、それでようやく、ローマの十字架につけられ、よみがえられたということが、人類の罪の赦しのため、神の子どもとなり、神の国をキリストにあって受け継ぐということが分かるのです。

神はそのために、長い年月をかけて、預言者たちにキリストがどのような方を証しされて、それでようやく、時が満ちてキリストが肉体をもって現れるようにしていただきました。そして、私たちは御霊によって、その明らかにされた時代に生きているのです。しかも、イスラエル人ではない私たちにも、御霊によってその約束にあずかることができているのです。

このような、とっておきの救いを、神はまるで、サプライズ・パーティーで驚かすように、私たちのために取っておきました。サプライズにするからこそ、隠しているからこそ、あらゆる知恵を尽くして、備えることができます。十字架につけられたキリストを信じている私たちが、このようにして神の奥義を知っていくのは、みこころです。掘っても掘っても、掘りつくすことのできない宝石が、埋められています。

イエス様は、この大きな変化を、復活された後に弟子たちに明らかにされました。エマオの途上にいた弟子たちにこう言われています。「ルカ 24:25-27 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、

愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」そして、弟子たちの前に現れた後に、再び説き明かされました。「ルカ 24:44-47 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46 こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』」この、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」が大事です。彼らには、その理解ができませんでした。主ご自身が心を開く必要があったのです。それが御霊の働きです。午後礼拝で、御霊によって初めて知ることができるのだということ学びます。

## 2B 世界の始まる前からの定め

そして、パウロは本文でこう言っています。「**その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。**」これは、どういうことでしょうか？

まず、「**世界の始まる前から定めておられたもの**」ということを見ていきましょう。パウロは、エペソ1章でこう教えています。「1:4-5 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。5 神は、みこころの良しとするところにしがたって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」私たちを、キリストと似た者にする、聖なる、傷のない者にすること、神の子どもにすることを、愛をもって、世界の始まる前から定めておられた、ということです。

永遠の神のなさることですから、スケールがあまりにも大きいです。神がいつ、私たちをご自分のかたちにキリストにあって取り戻すとお決めになられたのか？私たちが生まれて、悪いことを始めてから？いいえ。生まれる前に？まあ、そうですが、もっと、もっとはるか前です。世界の基が据えられる前から、そのようにお定めになられていたのです！それほど、神は私たちを愛しておられ、永遠の愛をもって愛しておられるのです！私は小学生の時に、怖くなったことがあります。「私の意識があることは、本当につい最近のこと、数年前のことだ。それ以前は、永遠の昔に至るまで意識がなかった。それが、死んだ後に永遠に続くのか？」そう思ったのです。死に対する恐れです。けれども、この言葉で解決されます。私たちのことを、神は永遠の昔のご計画の中ですでに覚えておられて、しかも、神の子どもにすると決めておられたのです。

そして、「**私たちの栄光のために**」定めておられたと言っています。同じくエペソ 1 章を見てみます。「エペ 1:9-11 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあ

って神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。」神のかたちに、キリストにあって回復した私たちは、キリストと共に栄光の姿をもって地上に戻って来ます。そしてキリストによる神の国を、共に統べ治め、相続することになるのです。

ですから、どうですか？この世を権力をもって支配している人々の知恵と、十字架に隠されている神の知恵と比べて、まさに月と蠶(すっぽん)です。そして、それは、十字架につけられたキリストを信じることによって、初めて見えてくる栄光です。モーセによる、地上の幕屋がキリストの栄光を現していますが、それを外から見ると、じゅごんの皮が覆っていますから、どす黒い色、あるいはこげ茶ですから、見た目にはなにこれ？となります。けれども、青色、白、紫、緋色の撚糸で、ケルビムを織られた門から入って、初めて、祭司を通して聖所の中に入り、そこで金の張られた板、金の机、金の燭台、垂れ幕を見ることができます。自分の罪に気づき、その罪を取り除くために、血を流されたキリストを信じる者だからこそ、その栄光にあずかることができるのです。

まだイエス様を自分の救い主、罪を清める方だと信じていない方は、ぜひ今、信じ、心に受け入れてください。そして、受け入れている方々は、この方にこそ神の栄光があるのだと知り、世にある知恵の中に埋もれず、聖霊によって絶えず神の栄光が明らかにされますように。そして御霊によって、自分自身が神の栄光を反映できますように、お祈りします。